

佳作 家族の絆

山形県
鶴岡市立朝陽第六小学校 五年

村山 耀子

「ばあちゃん、絆だより持ってきたよ。」

私がそう言うのと、ばあちゃんはいつもメガネをかけてすぐ絆だよりを読んでくれます。そして、

「ありがと。」

と、うれしそうに言ってくれます。私は、小学校四年生から家族内でおきた出来事を、毎月「絆だより」という新聞にまとめ、発行しています。そして、完成するとまっ先に山形にいるばあちゃんの所に送ったり、とどけたりします。これを書き始めたきっかけは、新聞を書くのが好きだったからです。今まで一年半も書き続けられたのは、もう一つの理由があります。それは、家族のみんなが絆だよりの感想を伝えてくれたからです。特に、ばあちゃんは、感想だけでなく、アドバイスも書いてくれました。例えば「発行日も書いた方が、あとから読み返す時にいつ書いたのか分かっていいよ。」

や、
「題名の部分をコピーして、毎回同じにした方がカッコイイんじゃない。」

と、いろんなことを教えてくれました。そのアドバイスされたことを頭に入れながら、次の号を書いていきました。するとどんどんカッコイイ新聞になりました。その絆だより

を読み返しながら、

「今月は、どんな感想をもらえるかなあ。」

と、ワクワクしながらとどけていました。「こうして、一年半も絆だよりを続けています。家族からも、

「読みやすくていいね。」

や、

「クイズが入っていてもおもしろいね。」

などと言ってもらい、とてもうれしくなりました。その山形のばあちゃんは、今年の六月に亡くなりました。その山形病気が進んで、五月号の絆だよりは、自分で読むことができず、じいちゃんが読んでくれたそうです。でも、うれしそうなお顔で私の書いた絆だよりを見てくれた、と聞きました。もう、ばあちゃんから感想やアドバイスをもらうことは出来ませんが、ばあちゃんから教えてもらったことを忘れずにこれからも絆だよりを書き続けていきたいです。本当は、ばあちゃんにもう一度会って、

「ありがと。」

を言いたいのですが、それは出来ないのです、絆だよりにありがとこの思いをこめて、これからも書いていこうと思います。

「ばあちゃん、ありがと。」